

令和4年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 20	公益目的事業 19
主査名	大森宣暁 宇都宮大学教授	
研究テーマ	ウィズコロナにおける夜の生活活動の質向上のための都市と交通のあり方に関する研究	
研究の目的： 本研究は、ウィズコロナにおいて、全ての人々が安全・安心・快適に夜間の自宅内外の生活活動に参加でき、生活の質を向上させる環境整備に向けて、我が国の社会的文化的特性を反映した都市と交通のあり方について、幅広い視点から検討を行うことを目的とした。		
研究の経過（4月～3月）： 計2回（9月29日、2月3日）の研究会を開催しながら以下の研究を進めた。 ・地方都市の繁華街活性化に関する研究の一環として、宇都宮市の泉町・本町の飲食店経営者へのインタビューおよびアンケート調査を行い、コロナ禍前後での経営状況の変化、繁華街活性化プロジェクトに対する意識、店舗のバリアフリーに対する意識を明らかにした。また、泉町・本町周辺居住者に対するアンケート調査を行い、繁華街に対する意識を明らかにした。 ・携帯電話位置情報ビッグデータを用いて、コロナ禍前後における複数都市の夜の行動分析を行った結果について、議論を行った。 ・2019年度末から首都圏居住者に対する飲酒活動と健康および幸福感に関する Web アンケート調査を毎年実施しているが、年度末に第4回目のパネル調査を実施した。		
研究の成果（自己評価含む）： 以下に記すように、興味深い成果が得られた。 ・泉町・本町飲食店経営者へのインタビューおよびアンケート調査データ分析の結果、(1)売り上げは、コロナ禍前と比較して、コロナ禍では10～50%に減少し、2022年度には20～80%と回復傾向にあること、(2)調査対象の飲食店経営者全員が、泉町・本町に賑わいを感じておらず、若者よりは現在も主な来訪者である40～70代の来客増加を望んでいること、(3)店舗出入口やトイレなどをバリアフリー化したいが、テナントビルであることや助成金制度がないことによりバリアフリー化を進められない状況にあること、などが明らかとなった。 ・携帯電話位置情報ビッグデータと土地利用・施設データを組み合わせることによって、コロナ禍前後の夜の行動の変化やその原因に関する分析の可能性があることがわかった。 ・飲酒活動の頻度について、コロナ禍前と比較してコロナ禍で、仕事関係の外飲みは30%、プライベートの外飲みは40%に減少し、2022年度でもそれぞれ50%と70%であったこと、宅飲みの頻度はコロナ禍前後で変化がないこと等、コロナ禍前後における飲酒活動の実態と意識の変化を確認した。		
今後の課題： コロナ禍がようやく落ち着いてきた今後、誰もが夜の街を安全・安心・快適に楽しめる都市と交通のあり方を引き続き検討することを今後の課題としたい。		